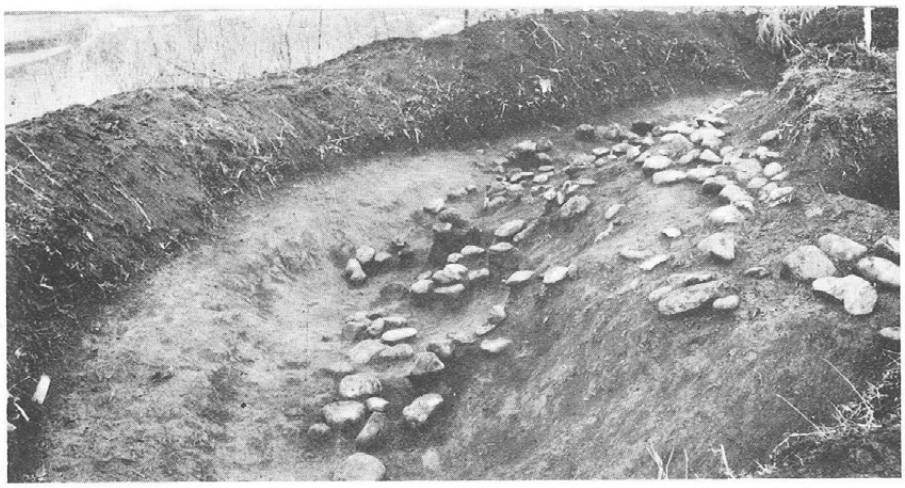
伊那市富県阿原古墳発掘報告

伊那市教育委員会

第2図版

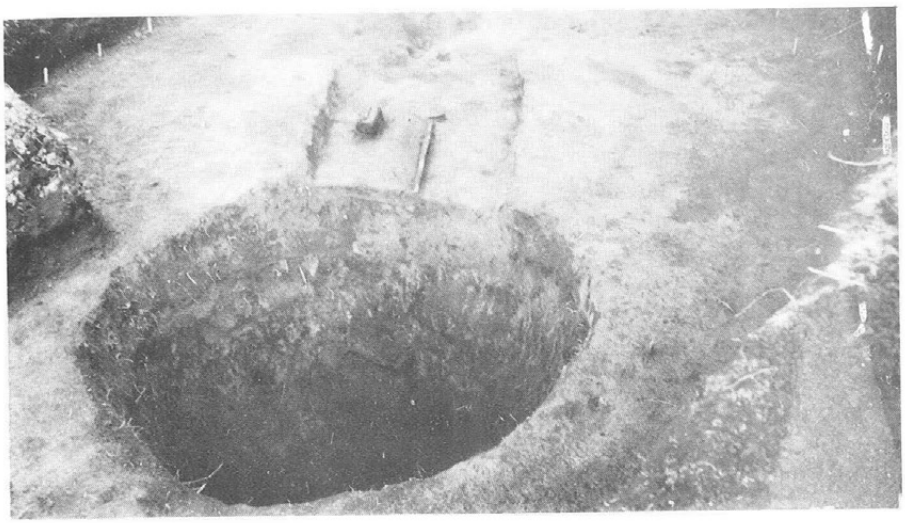
阿原古墳全景



葺石の状態(南側から)

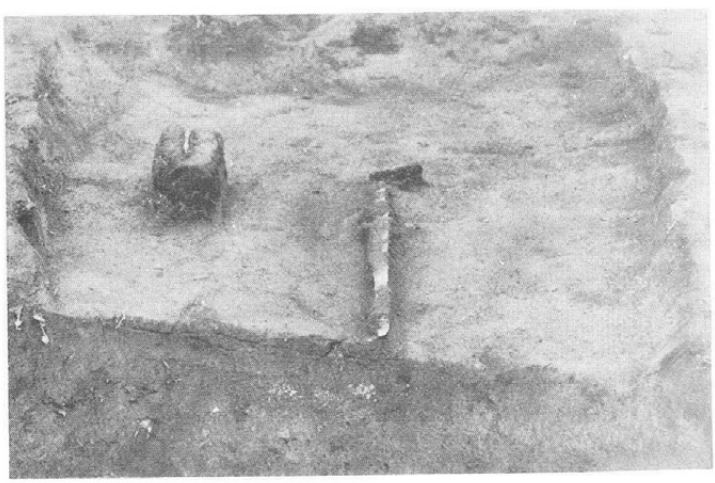
葺石の状態(東側から)

第1図版



内　部

遺物の出土状態



直刀・鉄鏃出土状態

序

近代社会の急激な発展によって、地域開発の現実的要求から、心ならずも貴重な遺跡を発掘せざるを得ない場合が次第に多くなった。市としても、三ツ木、天泊、福島、月見松の各遺跡も各種開発事業のためやむなく発掘し、それぞれ報告書を刊行してきた。

今回の富県阿原古墳も、農業構造改善事業地域にあたり、日ならずして古墳が消滅の運命に直面したのであるが、上伊那考古学会の諸氏によって古墳の重要性が指摘され、市としてもその重要性を認めて調査を決意したのである。

調査は昭和44年3月15日から20日までの6日間に行なったのであるが、その間多忙な折にもかかわらず県教育委員会指導主事林茂樹、神村透両先生には懇切なご指導を直接現地でいただけたことは幸甚の至りであった。また、調査担当者下平氏をはじめ調査団諸氏、地元弥生ヶ丘高校郷土クラブ員、地主北沢氏、地域の方々の心からなるご協力によって、多大なる成果があがったことについて深甚なる感謝を表わす次第である。

本古墳は、下平氏の考察によると、上伊那地方に於ては古期に属するのではないかとされており、この報告が上伊那地域の古墳時代の解明に必ず役立つと思えるので、主催者としても責任を果たしたことになり、刊行を喜びたいと思う。

昭和47年3月25日

伊那市教育委員会教育長
松　沢　一　美

伊那市富県阿原古墳発掘報告

下　平　秀　夫

1　調査の経過

阿原古墳は、通称阿原古墳群と呼ばれていたものであるが、今回の調査でこの内の一基のみが古墳と考えられるので、阿原古墳と呼ぶことにしたものである。これは緊急発掘の記録である。

阿原古墳の発掘調査は、昭和４４年３月１５日から３月２０日までの６日間、伊那市教育委員会によつて、伊那市大字富県字駒ケ原阿原において、緊急発掘調査が行なわれ記録保存を行なつたものである。

この調査は阿原地区の水田開発事業を、地主北沢敬作氏を中心として行なうこととなり、このため阿原古墳群の全部が破壊されることになり、上伊那考古学会の諸氏の努力と、伊那市教育委員会の理解によつて調査が行なわれる結果となつた。これに至るまでには、伊那在住の諸氏の保存に対する熱意はかたく、数回の話し合いによつて、記録保存という最悪の措置とはいえ、ここまでの努力は大変なものであつた。また長野県教育委員会神村透指導主事のご指導によつて、スムースに調査がはかどつた。さらに、林茂樹指導主事には、入院中にもかかわらず調査団に、数々の助言をたまわつた。記してお礼を申し上げたいと思う。

市教育委員会は、調査費を全額市費で負担され、調査団を編成し、また調査中、社会教育課諸氏全員が現場にたたれた。

調査に対しては、現場において多くの方々からご助言をいただいた。特に大沢和夫先生をはじめ、向山雅重先生には発掘例、文献に至るまでご指導をいただいた。衷心より感謝の意を表する次第である。

調査委員会、調査団の編成は次のようである。

阿原古墳郡緊急発掘調査委員会・調査団

1.　調査委員会

委員長	伊那市教育長	小林　重男
委　員	長野県文化財専門委員	向山　雅重
〃	伊那市文化財審議会委員長	有賀　京一
〃	上伊那教育会長	戸田　正広
委　員	上伊那考古学会長	北原　真人
〃	伊那市文化財審議会委員	田畑　清美
〃	〃	正木　一美

2.　調査団

発掘担当者	日本考古学協会会員	下平　秀夫
調査員	長野県考古学会会員	戸前　博之
〃	〃	矢口　忠良
〃	〃	友野　良一
〃	〃	御子柴泰正
〃	〃	根津　清志
〃	〃	紫　登巳夫

他に、福沢幸一氏をはじめ多くの方々、伊那弥生ケ丘高校生も参加され、調査の主力をはたしていただいた。深謝の意を表する。事務局として、春日社会教育課長、保坂係長、三沢主任、有賀主事、田中主事、酒井主事、公民館田畑館長、伊藤主事が連日参加された。

2　阿原古墳の調査

今回の発掘調査が行なわれるまで、この古墳に対する研究は、分布調査によるものである。１９５０年代の信濃史料刊行会によるものと、１９６０年代の上伊那史刊行会によるものである。信濃考古綜覧（１９６５信濃史料）によると、地名表に、阿原古墳群とし、第１号～第６号までの記録があり、注として、「村境いによるものか」とされ、古墳の存在に疑問を提示されている。

今回発掘に先だつて、３月１４日に、墳丘の観察を行なつたが、古墳と判定して当然と思われるものであつた。発掘においても古墳発掘の基本的方法によつて調査を行なつた。表１は測量の結果である。第１号から第５号まで全て、東西、南北に各２本ずつのトレンチを入れて調査を行なつた。しかし私共の観察したかぎりでは、全く古墳と判定する資料は得られなかつた。ただ第３号墳としたものから、墳土中に、皇宋通宝６点の出土があつた。

また目だつた点では、第３号墳から、墳丘中央部に４０cm大の長方形の板石が発見された。他の盛土からは全く、遺構、遺物の発見はなかつた。このような盛土に対しては、最近やや報告が行なわれつつあるが、全く不

明のところが多く、私は、現在報告を行なう資料がなく他の例の増加をまつて、再度報告を行ないたいと思う。今回は第６号墳とした、阿原古墳のみ報告したい。前述したように、第１号墳から第５号墳まで古墳でないとすると、阿原古墳群は存在しない。１基のみの単独墳であり、本報告では、阿原古墳と称したい。

阿原古墳の調査は、３月１５日から３月２０日まで６日間行なわれた。まず墳丘清掃、測量を済ませ、東西に墳丘を横断するトレンチを設定し、外部施設と、内部主体を求めた。すぐ南西側で、良好な葺石、周溝の発見があり、北側にも葺石が認められた。ここで墳丘の規模、破壊のことを考え、葺石の全面調査を主目標に調査した。３日目の１７日には葺石もほぼ全容を現わし、調査可能範囲は、全てに葺石がめぐらされ、周溝が存在することが明らかになつた。しかし内部主体の発見が、墳丘中央にあつた樹木と、それに接していた井戸様遺構によつてまどわされ、いたずらにトレンチを拡張させる結果となつた。

４日目に至り、現存墳頂より、1.2ｍ下でようやく、井戸様遺構に接し、前方後円墳の形態をした円部主体を発見したのであつた。

墳丘、葺石の状態を測量するのに時間をとり、予定を１日延長して３月２０日夕方終了したのである。後、矢口忠良、下平によつて遺物の調査が行なわれた。現在この古墳は水田化されて存在しない。

なお阿原第１号～第５号墳とされた盛土と、この阿原古墳は、１５０ｍはなれている。

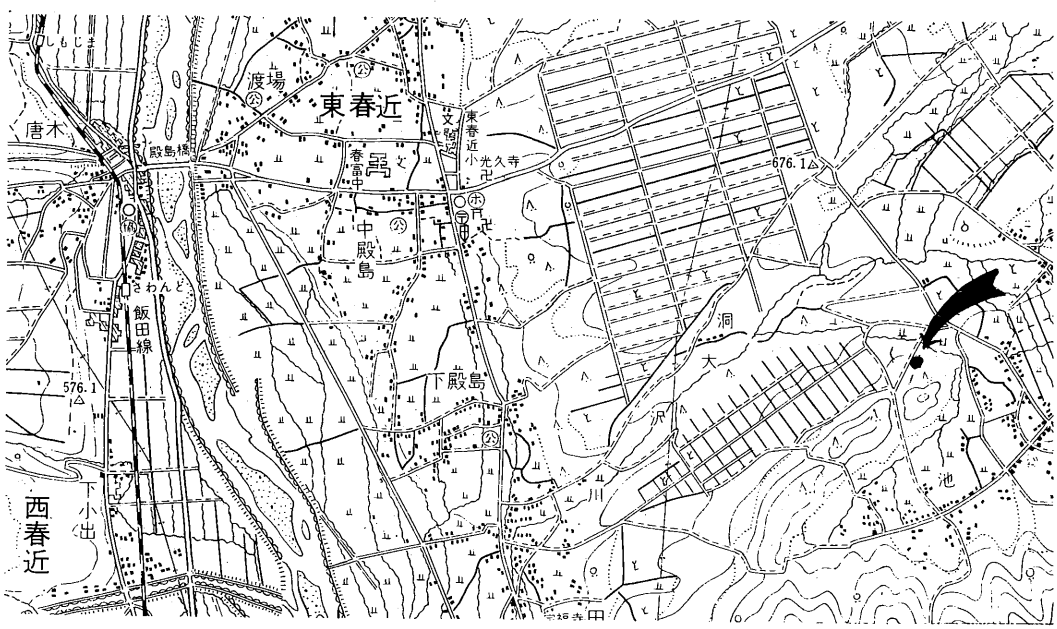
３　阿原古墳をめぐる環境<第１図>

阿原古墳は天竜川の形成した河岸段丘の左岸に位置し眼下の北西部は、一面に水田化し、天竜川の本流に流れこむ三峰川との合流地点に近い台地上にある。南側も最近では水田化され、地形を変えているが、高鳥谷山がせまつている。また背後には「池」という地名の部落が存し、以前かなりの湿地帯であつたという。

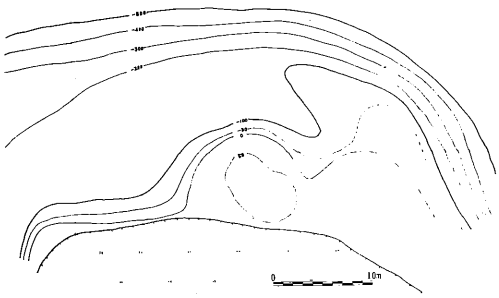
歴史的な関係では、この地域は三ツ木、御殿場遺跡などを中心に縄文式時代の大遺跡のあるところとして知られている。

この地で古墳の分布は、信濃考古綜覧、上伊那の考古学的調査によると１５基ほどである。（１９６６林茂樹他）（今回の調査で古墳ではないものとされた、阿原古墳群の５基をのぞくと１０基となる。）分布の状態は群集化するものはなく、散在的な分布である。このうちでは、阿原古墳より下方に存する、駒合古墳、蚕玉古墳の２基の方墳が目につく。他には、副装品の判名している如来堂古墳、根木屋１号、菖蒲平、テマテの各古墳がある。いずれも後期古墳時代の様相を示しているが、如来堂古墳の副装品の豊富さも、今後再検討の必要性を感ずるものである。

阿原古墳はこれらの古墳よりも高所にあるが、これらの古墳と阿原古墳との関連はこれからの問題として残るものである。



第１図　阿原古墳地図　（１：３００００）



第２図　墳丘測量図　（１：５）

４　阿原古墳の墳丘＜第２図＞

墳丘南東部は古くから開拓され水田化し、著しく地形を変えている。今回の調査でも北西部は、野菜貯蔵用の横穴が約２ｍ掘られ、また墳丘南も墳頂部に井戸用ピットが穿たれていた。

今回の発掘に先立つて行なつた測量では、東西１０ｍ南北１５ｍ、高さ２ｍの法量をもつ円墳である。

本古墳の特色とさるものは、全面にふかれた葺石と、巾１ｍの周溝である。

墳丘構造を南北に切断するトレンチにより観察すると大体５層に分けられた。表土層・暗褐色層・褐色層と変化し、黒色土のバンドをはさんで、黄色土の地山に続き内部主体の下部はやや複雑な地層を示している。内部主体は黄色土の地山の上に、黒色土、さらに褐色土をかためて、構築している。

墳丘外部施設については、約半分の墳丘外表部をはぎ全域にめぐる葺石を確認した（第３図）。また墳丘裾部に約１ｍの周溝の存在も確認できた。

葺石帯下部に、数個所にわたつて土師器、須恵器の出土があつたが、埴輪などの発見はなく、その他の外部施設もなかつた。

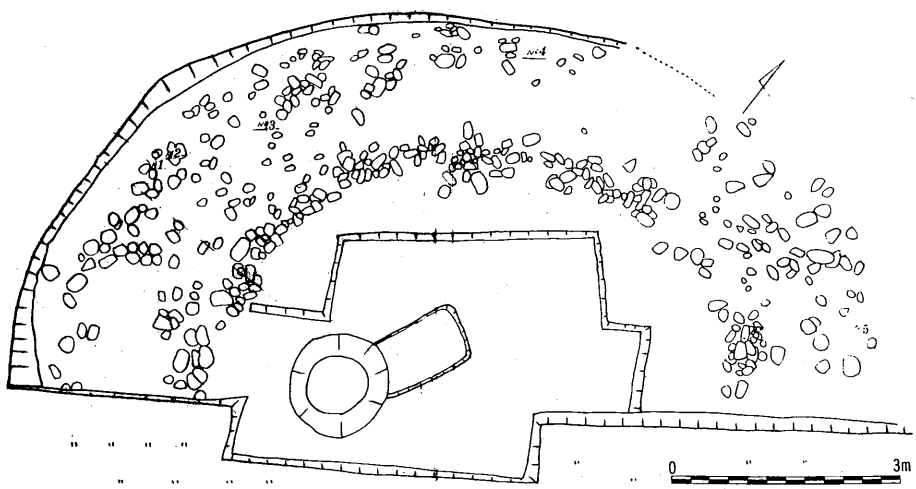
葺石の状態から概述すると、一部周溝内に落下したものもあるが、墳丘中央部に約１ｍ巾で葺かれている。石は３０～４０ｃｍ大の円礫を用い、ほぼ重なることなく一面に葺かれているが、今回調査の北西部のみの観察によると、密・疎密の差はないようである。

今回調査できたのは、傾斜面に面した北西部である。これは葺石の全面調査のなされた岡山県月の輪古墳（近藤他１９６０）・静岡県春林院古墳（内藤１９６６）で指摘されたように、立地面を考えると、葺石を「視覚的に表現する」位置である。

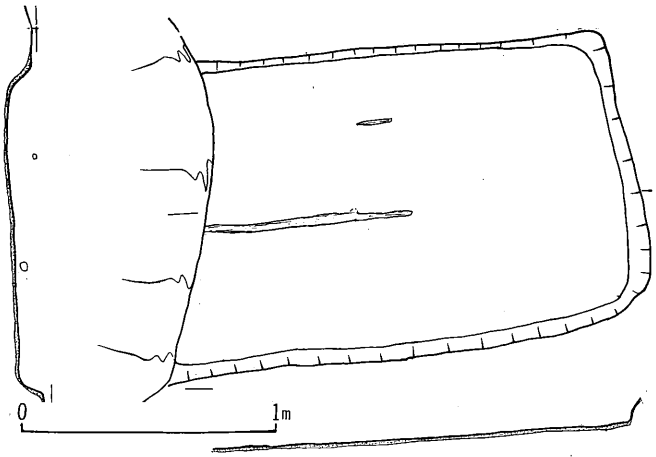
周溝は約１ｍ巾で、深さは４０ｃｍ前後の浅いもので、墳丘を取りまいているが北側にいたるにしたがい、やや浅くなる。

５　内部主体＜第４図＞

墳丘の切断と合せたトレンチを東西に入れたところが墳丘南側部で円形の井戸状のピットが発見され、さらに内部主体の検出を急いで、東西７ｍ、南北１０ｍの発掘溝を設定した所、井戸状遺構に接続した長方形プランが発見された。これは南北1.７ｍ、東西1.２ｍで長軸をほぼ東１５°におき、粘土床とよばれる内部主体と想定しつつも、プランがあたかも前方後円墳形のため、とまどいつつ、セクション観察のため、長軸にそ



第３図　阿原葺石測量図　（１：４）



第４図　内部主体　（１：３）

つて切断した。その結果、底部、側部に薄く粘土を貼つた深さ１５cmの内部主体を発見した。プランは非常に明確であつたが、粘土床にするには、粘土の貼り方が少ない様な気がしたが、褐色の基盤内へ掘り込まれたものである。

このプランの中央底部に直刀が、その横に平行して鉄鏃が発見された。

後世の盗掘はなかつたと思われるが、すでに述べたように、井戸状遺構によつて一部分は破壊されているためその全容は把握するまでにはいたつていない。

6　遺物の出土状況

出土遺物は、内部主体内に直刀１、鉄鏃１、鉄鏃破片１と、墳丘裾部で、葺石帯内に土師器坏形土器４、小型甕形土器１、須恵器𤭯形土器２、他に小破片であるが、土師器高坏形土器１の出土があつた。

A　内部主体

1）直刀は、内部主体中央に先を南側にむけ、刀部は、西側にむけていた。床面にほぼ接するような状態であつた。床面と直刀の間には、内部主体に混入していた褐色土が混入していた。

2）鉄鏃は１本のみの出土である。直刀と平行し、刀部を左側にむけている。比較的浅いところから出土している。

B　墳　丘

墳丘裾部から、数ケ所に分かれて出土し出土状態は一定していない。

①とした甕形土器、②の坏形土器、③の坏形土器は、ほとんど接近した形である。④の須恵器𤭯形土器は、葺石帯内にはさまれて出土した。⑤の土師器高坏形土器は、周湟内からの出土であり、⑥の墳丘東側の裾部から出土の土師器片は、器形の判明もできないくらいの状態であつた。

墳丘からの出土の状態は以上のようなものである。出土位置、状態が一定でなく、裾部からの出土であり、墳頂部からの転落と思われる。

7　出土遺物

1,　直刀＜第５図＞

全長８０cm、身の長さ６７cm、茎の長さ１３cmで、平棟、平造りで身幅の最大は３５cmで、関は片関である。拵は比較的よくのこし、把には木質部を残し、鋒は欠いている。

2,　鉄鏃＜第５図＞

著しく錆着しているが、尖根式のもので片刃式といわれる形式である。全長１０.８cm、断面方形のもので、平棟、平造りである。

3,　土師器＜第６図＞

甕形土器＜第６図－１＞

小型のもので、器形は最大径を胴部にもち、口縁部はゆるやかに外反し、底部は丸底である。

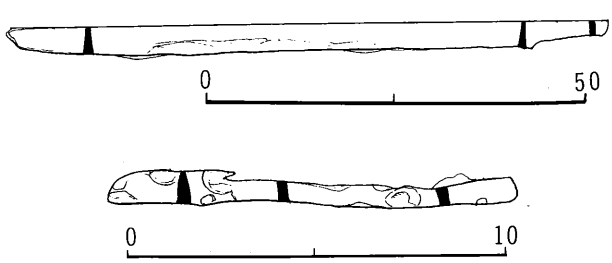
製作技法は、内表面にまき上げ痕と思われるものがみられる。器形をととのえた後、外表面は口縁部を横方向へナデ調整されている。

肩部から胴部にかけては、植物束様のもので上方から下方へ調整し、さらに一部横方向へナデを行なつている。

胴部下端から底部にかけては、ヘラ削りを行ない、器形にそつた方向で、その上にナデ調整している。底部は逆時計まわりにヘラ削りが行なわれている。

内面は、口縁部をナデ調整、胴部は放射状に指腹によるナデが行なわれ、底部はヘラによる逆時計方向に調整がなされている。

坏形土器＜第６図２～６＞



第５図　副装品　直刀・鉄鏃

いずれもほぼ完形土器である。器形的に深いものと、浅いものに分類できる。

Aに入るものは(2)である。

器形は口縁部で小さく外反、胴部はやや直立気味で、底部は丸底である。

ヘラ削りによつて表面の整形痕の観察は非常にむずかしくなつている。口縁部から胴部にかけては、横方向へのヘラ削りがなされ、さらに底部にかけては、荒いヘラ状工具によつて削ずられ、その上にヘラによるナデ調整がなされている。内面は約3㎜巾のヘラ状工具によつて著しくナデ調整され、底部から体部接点の外方にかけて放射状のヘラ工具による、時計まわり方向に暗文様のものがみられる。色調は赤褐色で、焼成、胎土ともに良好である。

B類に分類されるのは(3)(4)(5)(6)である。器形は、器高4.5㎝でA類よりもやや深く、口縁端部が鈍く外反し稜ができるものである。胴部はやや外反気味で、ややゆるい立ち上がりを示し、底部は丸底である。

成形技法は、ヘラ状工具による調整が著しくて、判明しない。調整は、口縁部に植物束様のものでヨコナデしさらにナデ調整している。口縁部から胴部にかけては、逆時計方向に荒いヘラ状工具により削られ、整形し、後に細かくヘラ磨きされるものである。定部は、逆時計方向の荒いヘラ削りが行なわれている。内表面もヘラ状工具によるナデ、みがき整形が行なわれている。底部には指頭による押圧整形がされ、さらにその上に無規則的なヘラ状工具によるナデ調整がされている。

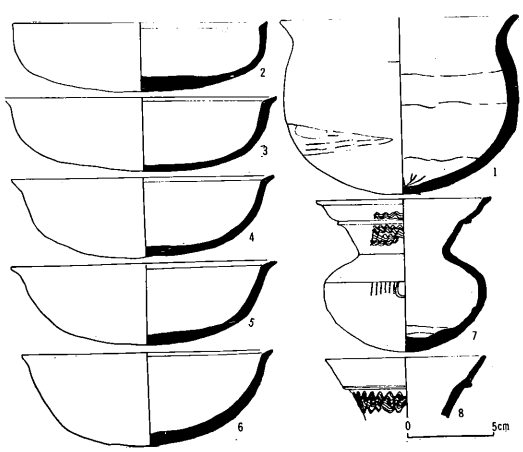
須恵器聴形土器<第6図7・8>

2点出土しているが、ともに破片であつて、(7)はほぼ復元できる。

器形は短く外方上に広がる口頸部をもち、体部に肩をつくり、底部は丸底である。胴部は円に近い。最大型は口縁部にあり、頸部には稜を持つている。文様は口縁部頸部に櫛描き波状文をえがき、胴部には、櫛状工具による点列文を施している。文様帯上に円孔をあけているが全く突起していない。

(7)は、胴部から底部にかけて、ヘラ削りが器形にそつてみられる。

なお、土師器、須恵器の実測は矢口忠良氏によるもので、記して感謝する。



第6図　土師器・須恵器

8　阿原古墳をめぐる諸問題

A　墳丘の立地について

前述したように墳丘南側は、水田化され、その地形の大部分を変えている。今回調査ができ、葺石の状態を確認できた北側は、雑木、ブッシュによつて現在は非常に見通しがよくないが、台地上に立地するこの古墳は、下方の水田からは比高20mで、下方からは阿原古墳を望める。

このような台地上に立地する古墳は、葺石を外部施設に持つ阿原古墳を考えるうえで、大きな意味を持つものである。すなわち、岡山月の輪古墳（近藤他　1960）の報告の中で述べられた、「墳丘の壮厳化と周囲との隔絶の効果をあげるもの」としての位置、また静岡春林院古墳（内藤　1966）で「低平な台地の突出部に営なまれているこの古墳は、明らかにその南側または、東側から日常的に仰ぎ見られる位置にあるところから、葺石による視覚的効果が考慮されて築造されたことが考えられるであろう」と指摘した。阿原古墳の立地もこのような指摘と共通するものがある。

B　外部施設――葺石について

外部施設については、特に葺石と周湟に良好な資料が得られた。古くから古墳の外部施設としての葺石の存在が注目され、また岡山月の輪古墳のより大きな問題提起がなされながら以外に調査、報告された例が少なく、部分的なものが多い。水田によつて一部破壊され全面調査に至らなかつたものの、葺石の状態を示す一つの資料となつたと思う。

発掘された範囲では、全面に葺かれていたもので、巾は1mで、同程度の密度でふかれていたものと思われる。上伊那地方には約191基の古墳が分布するがこのうち葺石を持つているものは、信濃考古綜覧によると（1956　信濃史料）15基である。これは全体

の約８％にあたり、県下では発達した地域であろう。時期的なこと、立地上については、不明な部分が多い。現在調査された例では、上伊那郡宮田村三ツ塚古墳がある。（友野　1955）

三ツ塚古墳は阿原古墳より後出的であるのでこの地域では、阿原古墳よりもおくれた時期まで葺石が行なわれていたものであろう。

長野県── 特に北信地方では積石塚古墳の一種として土石混合墳と呼ばれる存在がある。栗林紀道氏の分類されたなかに、「内部は土で、外部のみ石で被つたもの」も土石混合墳の定義に入つている。（信濃史料　1956）最近の積石塚古墳の発掘調査によつて、長野県内における積石塚古墳の構造も明らかにされつつある。（大塚他　1968、米山他　1970）今回の阿原古墳の調査によつて、土石混合墳と呼ばれる一連の古墳が、再検討されるきつかけを与えてくれた。阿原古墳においては、墳丘外表面にのみ石が存在し、他には、墳土内に全く含まれていなかつた。発掘報告された県内の古墳では、中野市厚貝山の神古墳、同田麦北古墳があり（横山　1953）また、東筑摩郡本郷村桜ケ丘古墳も同様で、（大場 1966）いずれも古い様相を示している。阿原古墳もこれらの同様な性格が考えられよう。

C内部主体について

一種の粘土床というべきものと思われるが非常に浅くまた遺体を被うべき上部施設は、われわれの観察したところでは発見できなかつた。方形プランの底部、側部も粘土をうすくはつてあつたのみである。直刀、鉄鏃１本のみで他に釘などの鉄器類は発見できず木棺などの存在を示す遺物はなかつた。やはり一種の粘土床であろう。

県内における粘土構造の内部主体をみると以外に少なく、報告されたものでも５基である。

中野市厚見山の神古墳（横山　1953）
中野市田麦北古墳（横山．1953）
諏訪市フネ古墳（藤森　1965）
諏訪市大熊片山古墳（中村・宮坂他　1969）
東筑摩郡本郷村桜ケ丘古墳（大場　1966）
上伊那郡宮田村三ツ塚古墳（友野　1955）

の例がある。これらの古墳をみると、副葬品が豊富で、年代的に古い様相を示し、各地域で、横穴式石室出現の前段階で、立地的にも、群集化していないところから、独立墳的な性格を持ち、前期的な様相である。長野県においても、このような粘土構造を持つ古墳は前Ⅳ期から後Ⅰ期の前後に位置すると思われる。葺石と同様内部主体からも古い様相がうかがえる。葺石を持たないのは諏訪市フネ片山古墳のみである。

他地域にみえる粘土構造をみるとこれも同様な傾向がうかがえる。東国地方では、内部主体が粘土床、槨を持つものは、前Ⅱ期から後Ⅰ期の段階であるという。（大塚　1967）

伊那地方に近接する地域では、天竜川下流地域では、現在までその例を私は知らない。さらに下ると、愛知県内では、豊田大塚古墳の研究によると（久永　1965）県内で須恵器第１型式をともなう古墳は、内部主体は粘土構造であるという。また静岡県では、春林院古墳（内藤　1966）のなかで内藤教授は、「一般に古式古墳において粘土構造の埋葬施設が用いられる時期は、前Ⅱ期にはじまり、前Ⅲ、Ⅳにかけて普及したと言われ、地域的にも、畿内を中心にして、九州から関東にわたる全域に採用されたことが、すでに周知の事実として認められている」とし、さらに、静岡県の発掘例から「そのいずれもが、前Ⅱ期末から前Ⅲ、Ⅳ期── 言いかえれば、俗に中期的古墳といわれる性格の古墳に、問題の粘土　が施設されている事実を認めることができるであろう」とされている。

阿原古墳の場合も、一連の粘土構造の内部主体の文化の流れのなかに入れてよいであろう。

内部主体の検討からも後Ⅰ期の時期の古墳と考えられる。

D　出土遺物について

特に土器についてのみ考察しておきたい。

a　土師器　　坏形土器の主な特色を上げてみると①口縁端部が鈍く外反していること　②底部が丸底の器形を持つている。③製作技法上の面からは外表面に著しいヘラ状工具による荒いヘラ削り、さらにその上にヘラ磨きを行なつている。④器壁がうすいこと。以上のような特色が求められる。このような特色を持つた土器を県内で他に求めると、小県郡真田町うずら沢Ｂ遺跡（笹沢　1968）上田市信大繊維学部内遺跡（川上 1969）さらに住居址内の編年の行なわれているものでは、更埴市城ノ内遺跡第３様式（岩崎　1961）にその親縁性が認められる。

また調査の進んでいる南関東をみると、八王子市中田遺跡の編年では、製作技法上鬼高Ⅰ式土器とされたものにあてはまる。

b　須恵器　　最も苦慮した点である。先学の須恵器の編年によれば、阿原古墳出土の聴形土器は明らかに須恵器第１型式に分類されるものである。

しかしながら県内はおろか、東国地方においては、

「古墳出土品の内に須恵器第1型式の出土はない」（大塚　1967）といわれている。いずれも口頸部が長大化してくる第2型式以後のものである。

関東地方において土師器に須恵器が伴出するのは、鬼高式以後とされている。古墳出土の第1型式の須恵器と鬼高1式土器と伴出しても不思議でない。あえてこれらの土器に年代をあてれば、須恵器第1型式の盛行年代は5世紀後半から6世紀代があてられる。（田辺 1966）

畿内地方では、須恵器第1型式は、前Ⅳ期の時期に行なわれたという指摘がされている。（大塚　1967）副葬品よりも、墓前祭に用いられた状態で出土していることから、阿原古墳の場合もいくぶん年代を下げていいと思う。

次に出土状態についての検討であるが、多くの先学がされてきたように、また前述したように、墳頂部からの転落と思われる状態を示している。「おそらく埋葬施設が完成され、墳頂部の化粧が終了した後に、墓前祭または、墓上祭ともいうべき祭祀的行事に使用されたもの」（内藤　1966）という指摘は阿原古墳の場合もあてはまるであろう。

E　築造年代について

前述してきたものでつきているが、ここで改めて阿原古墳の築造年代を考えてみたい。

まず立地は、台地上に独立墳的な性格を有し群集群の出現以前の時期であろう。

次に葺石をめぐらせていることも、古い時期の様相を示すものである。一般に葺石の盛行年代は、前Ⅳ期から後Ⅰ期までと思われる。「葺石による視覚的効果が考慮されて築造」されたものという葺石の性格からも古式な性格を示すものであろう。

内部主体は、副葬品とともに前期的な様相を明らかに示すものであろう。これについてはすでに述べてある。極めて簡素な粘土構造はどんな位置にくるものか、まだ解明しえないが、横穴式石室に先行するものであると考えられる。そして前述したように県内では、各地域において、竪穴式石室につぐ位置にあたえられるものと思われる。

最も明確に年代の判定できるものは、副葬品であろう。しかし阿原古墳の場合、非常に貧弱な副葬品である。内部主体からの出土品は、直刀1と鉄鏃1のみである。全く特色のないもので、後期古墳に一般的に出土するものである。これは阿原古墳と同様の性格を持つ、中野市厚見山の神古墳、田麦北古墳にしても豊富な副葬品があつた。このような点からもやや年代は下つてくるかも知れない。この古墳で一番問題になるものは、葺石下端部から出土した須恵器の年代である。前述したように、第1型式に属するものであろう。また、土師器の年代も鬼高Ⅰ式に比定きれるものである。これらの年代を今までの研究からみると、岩崎卓也氏は城ノ内第3様式を、5世紀末から6世紀初頭とされた（岩崎　1961、1963）これは須恵器第1型式の年代とも同一になる。また最近の関東地方の研究でも市川市史Ⅰ（杉原　1971）においても鬼高式の開始を6世紀からにしている。

阿原古墳の年代もここらあたりに求め、後Ⅰ期の時期に考えたいと思う。

総　括

最後にまとめをかねて、上伊那地方の古墳文化における阿原古墳の位置を考えたいと思う。考察してきたように、この阿原古墳の築造年代が6世紀前半――後Ⅰ期に誤まりがないとすれば、現在までに発見されている上伊那地方の古墳文化では、一番古いものと思われる。

上伊那地方で最大の古墳であり、その年代が注目され近設する下伊那地方の古墳文化と関連すると思われる、前方後円墳の松島王墓古墳がある。いまだに調査はなく墳丘測量図から判断すると、後円部と前方部の高さがほぼ同じ点、前方部が広がる点などから後期古墳の様相を示している。（藤森　1968）また前述した宮田三ツ塚古墳も、以前調査者や、本田氏が想定された年代よりももう少し古くなるように思われ、阿原古墳よりも少しおくれる年代が与えられよう。（友野　1955、林 1966）（注）1。これが認められれば、粘土構造を内部主体とし、葺石をめぐらせた古墳のグループは、上伊那地方において、松島王墓古墳よりも先行し、また上伊那地方における群集墳の発生よりも前段階であり、下伊那地方の古墳文化にみられる、兼清塚古墳を中心とした、前方後円墳に、竪穴式石室を内部主体とした古式古墳のグループとその後、6世紀代、7世紀前半と横穴式石室のグループと比較的スムースに、古墳文化の移行が行なわれた。天竜川下流の飯田盆地とは、やや文化の性格を異質のものにしているのではなかろうか。いいかえれば、この上伊那地方では、古墳発生の初期の段階――6世紀前半の部分では、天竜川上流の諏訪地方との関連の方がより強かつたのではなかつたかと、秘かに考えるのである。このことは、たつた一基の古墳の発掘からまた、この地方の古墳文化の研究がおくれていること、また私自身この地域の古墳は、断片的にしか見ていない。このような状態からあくまで試論の段階であり、一つの私自身の問題

として今後に残したい課題なのである。

またこの報告を書くにあたり、上伊那地方、諏訪地方下伊那地方の古墳の様相を少しながら調べる機会を持つたし、そのきつかけを得た。現在非常に多くの問題が内在していることに気がついた。多くの先学の方々に導びかれながら研究を進めたいと思う。

注1. 参考文献

信濃史料刊行会　1956　信濃考古綜覧上・下

林茂樹他　1966　上伊那の考古学的調査

近藤義郎他　1960　月の輪古墳の研究

内藤晃　1966　春林院古墳

友野良一　1955　上伊那郡宮田村三ツ塚古墳発掘概報（伊那 1955 －10）

大塚初重、小林三郎、下平秀夫　1968　信濃長原古墳群

米山一政他　1970　大室南谷古墳発掘概報

横山浩一　1953　「下高井」所収

大場磐雄他　1966　信濃浅間古墳

藤森栄一、宮坂光昭　1965　諏訪市上社下社古墳（考古学集刊3－1）

大塚初重　1967　古墳の変遷（日本の考古学Ⅳ）

久永春男他　1965　豊田下塚古墳発掘報告書

笹沢浩　1968　信濃における鬼高式土器の開始（信濃20－3）

川上元　1969　「信大繊維学部校庭遺跡」長野県考古学会誌9

岩崎卓也　1961　更埴市城ノ内遺跡の研究

岩崎卓也　1963　東日本における土師器の研究

田辺昭三　1966　陶邑古窯址群1

杉原荘介　1971　市川市史第1巻

藤森栄一　1968　信濃古代文化の考古学的試論

藤森栄一、宮坂光昭、中村竜雄　1969　諏訪市大熊片山古墳（長野県考古学会誌7号）